

授業時における災害（地震）発生時の初期対応について（p.2から）

休み時間・昼食時における地震発生時の対応について（p.5から）

生徒の登下校時における災害（地震）発生時の初期対応について（p.8から）

マニュアルをよく読み、日頃から危機管理の能力を鍛えてください

2014（H26）年度版

松本第一高等学校
安全管理委員会

先生のお名前 _____

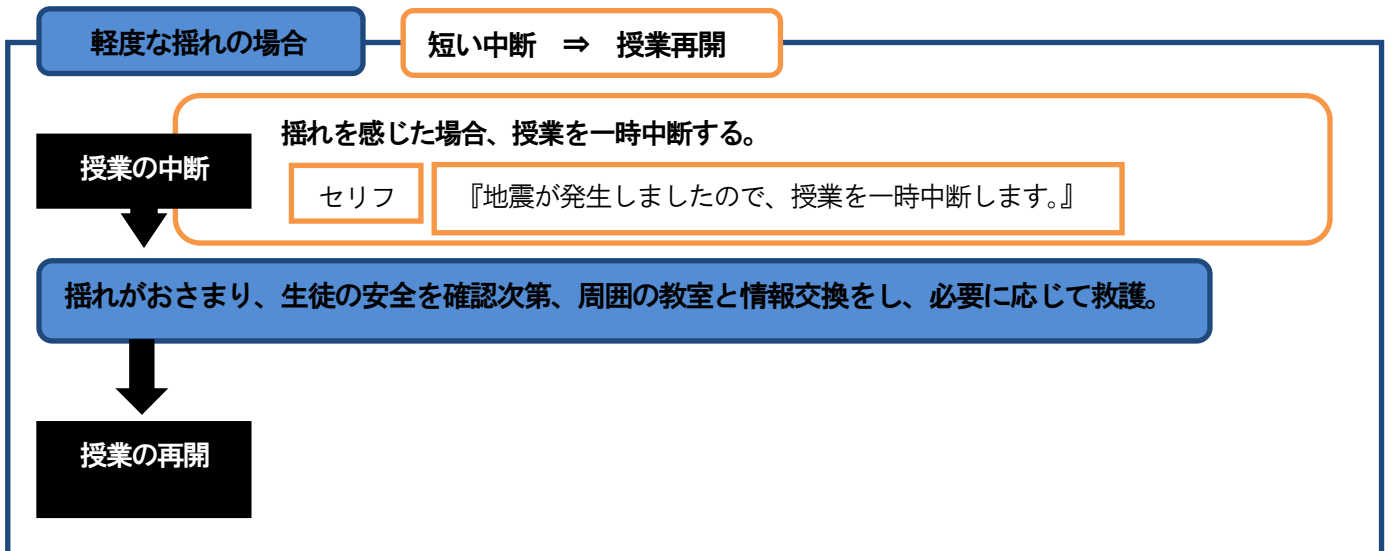
授業時における地震発生時の対応について（初期対応マニュアル）

各授業の際には、

- * 各教室ごとに、避難経路を把握しておいてください。

地震の強さに応じて下記の対応をとり、生徒及びご自身の安全を確保して下さい。

- * 中断時の生徒への対応は、冷静に（冷静を装って）おこなってください。
- * 授業再開前には必ず周囲の教室と「被害・けがをした生徒」の有無を含めた情報交換をし、必要な場合には救護に当たる等の配慮をすること。



やや大きな揺れ、大きな揺れの場合（または緊急地震速報が鳴った場合）

長い中断 ⇒ 指示を待つ

授業の中断

- ① 揺れを感じた場合、生徒に机の下に身を隠し、頭を保護するよう指示する。

セリフ

『机の下に身を隠し、頭を保護して下さい。』

先生方も机の下に身を隠す。

- ② 揺れがおさまったら、各教室のドアを開け、出口を確保する。

セリフ

『これから、地震の状況を確認します。授業は一時中断します。机の下に身を隠したまま、指示があるまで、余震に備えその場で待ってください。ケガをした生徒は保健室にて手当・治療を行いますので、今、声を出して申し出てください。』

- ③ その間に隣の教室と情報交換をし、ケガ人がいた場合には、保健室に連れていく。
(隣の教室との連携)

この時、各教室内の生徒は机の下のまま。

状況の報告

管理職、安全管理委員会の集合。本部を第一職員室に設置。

「授業の再開」か「避難が必要」の判断。校内放送を用い指示する。

授業の再開

放送の指示で、授業を再開する。

避難の開始

放送の指示で、避難を開始する。

放送

『余震が続くと考えられますので、避難場所に退避します。各教室の先生方は、教室内の人数を確認し、再集合後の確認作業のため出欠簿を持参して避難して下さい。避難場所での集合は、クラスごとではなく、各教室ごと、その先生の前に整列して下さい。それでは、各教室ごと避難経路を確認した上で、避難を開始して下さい。』

避難先 南棟・中央棟・体育館 ⇒ 人工芝コート
東棟・北棟 ⇒ フリースペース ⇒ 指示後に、人工芝コート
最終的な屋外臨時本部 ⇒ 人工芝コート

状況の確認と報告

人数の確認

- ① 各講座ごと、「教室を出た際の人数」と「避難場所に集まった際の人数」を確認。
- ② 揃っていない場合には、いない生徒が誰かを把握するために出欠簿で確認する。
- ③ 結果を本部（人工芝コートに設置）に報告し、必要あれば対応を協議する。

確認作業 協議内容

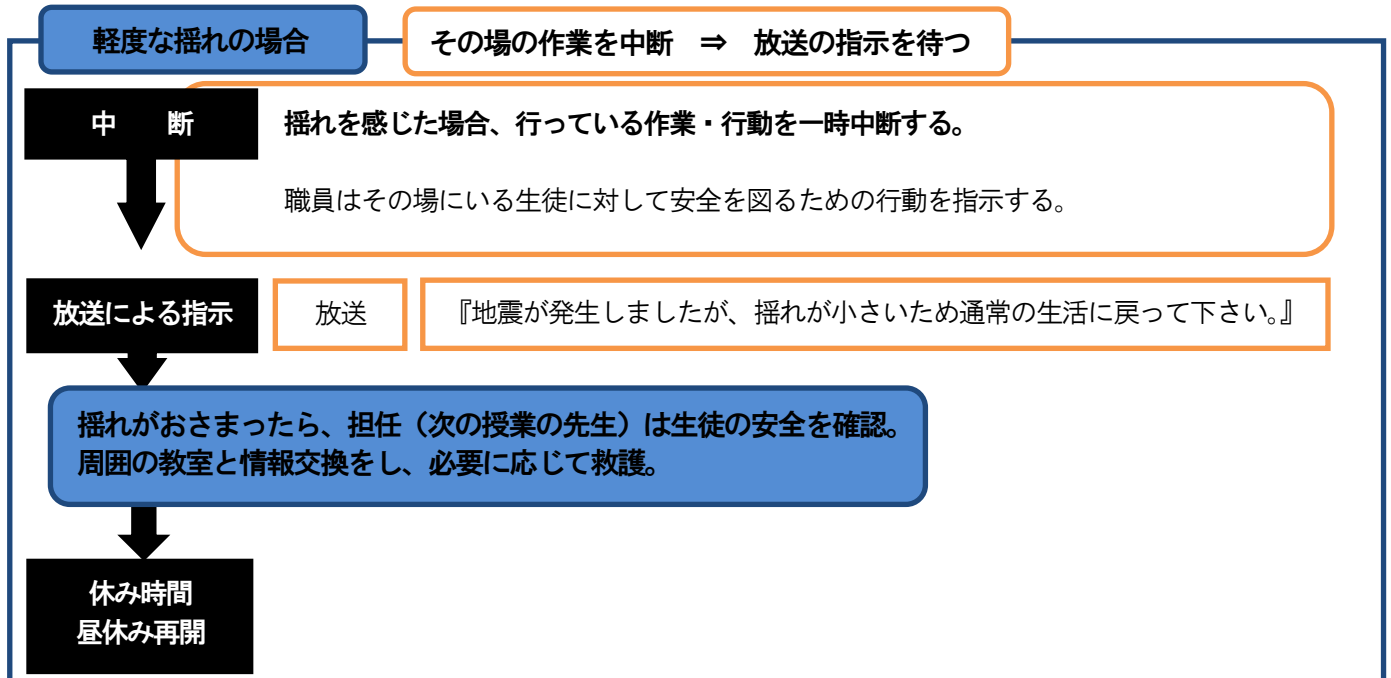
最優先

- ① 余震などが考えられるため、生徒全員と教職員全員の身の安全を第一とし、生徒の安全な待機場所の確保に努める。
- ② 動向が確認できない生徒が一人でもいた場合には、男性の副担任の教職員で分担を決め、捜索にあたる。(本部は、捜索する教員の動向を確認しながら)
- ③ ケガ人の対応は女性教職員であたる。おそらく学校内で処置せざるをえない。
- ④ 担任は、生徒と自分の情報通信端末類(携帯電話)と「生徒調べ」を取りに行く。各研究室ごと複数名で。
一人で行かなくてはならない研究室の場合も、必ず帯同者をつけ、複数名で行動する。

二次優先

- ① 火災の発生しそうな箇所を定期的に巡回する。
- ② 状況を判断し、可能であれば、各クラスごと、生徒が荷物を取りに行く。クラスごとの集団行動。分散させ集中させない。
動向(人数)の確認作業は必要。
- ③ 状況を判断し、可能であれば、教職員も自分の荷物を取りに行く。各研究室ごと複数名で。
一人で行かなくてはならない研究室の場合も、必ず帯同者をつけ、複数名で行動する。
各研究室ごとの集団行動。分散させ集中しない。
- ④ メディアから被害状況の情報を得、生徒の帰宅方法について検討を始める。各生徒の帰宅は「保護者の指示か送迎」による。
それがない場合には、翌日まで本校にて避難させる。その場合の退避場所を検討する。

休み時間・昼食時における地震発生時の対応について（初期対応マニュアル）



やや大きな揺れ、大きな揺れの場合（または緊急地震速報が鳴った場合）

作業の中断 ⇒ 指示を待つ

中 断

- ① 揺れを感じた場合、各所の職員はその場にいる生徒に対して安全を図るための行動を指示する。

セリフ

『落下物や倒壊物やガラスなどに注意してその場で身の安全を守りなさい。』
『火気を使用している場合は揺れが収まった後に注意して消火しなさい。』
『机の下に身を隠し、頭を保護して下さい。』 など。

先生方も安全の確保をする。

放送による指示
状況の確認

- ② 揺れがおさまったら、放送にて出口を確保するよう指示し、次の指示が出るまでその場に待機させる。

放送

『これから、地震の状況を確認します。机の下に身を隠したまま、指示があるまで、余震に備えその場で待ってください。教室の出口付近にいる生徒は出口を確保してください。ケガをした生徒は保健室にて手当・治療を行いますので、近くの人に申し出てください。』

管理職、安全管理委員会の集合。本部を第一職員室に設置。

「休み時間の再開」か「避難が必要」かの判断。校内放送を用い指示する。

休み時間の再開

放送の指示で、休み時間を再開する。

避難の開始

次ページ

教室外（廊下・外など）にいた生徒ならびに教員

その場から近い避難場所（フリースペースあるいは人工芝コート）へ避難。



避難の開始

放送の指示で、避難を開始する。

放送

『余震が続くと考えられますので、避難場所に退避します。
北棟、東棟、中央棟にいる生徒は、フリースペースへ。体育館、南棟にいる生徒は人工芝コートへ一次避難してください。安全確保ができた上で、フリースペースで出欠確認をします。各クラスの担任の先生方は、出欠簿を持参して避難して下さい。フリースペースでの集合は、クラスごと担任の先生の前に整列してください。それでは、避難経路を確認した上で、避難を開始して下さい。』

一次避難

- 体育館・南棟にいた生徒について（第2職員室職員が指揮をとる）
人工芝コートの東側から 3学年 → 2学年 → 1学年 の順にクラスごと整列させる。
- 東棟・北棟・中央棟にいた生徒について
フリースペースの北側から 3学年 → 2学年 → 1学年 の順にクラスごと整列させる。
それぞれの棟から生徒が避難し、整列した頃を見計らって、3学年から人工芝コートに避難させる。

状況の確認と報告

人数の確認

- ① 各クラスごと、出欠確認。
- ② 揃っていない場合には、いない生徒が誰かを把握するために出欠簿で確認する。
- ③ 結果を本部に報告し、必要あれば対応を協議する。

確認作業 協議内容

最優先

P.4 と同じ

二次優先

P.4 と同じ

生徒の登下校時における災害（地震）発生時の初期対応について

- A 次ページの「災害発生時の初期避難対応について」（学校提出用・家庭保管用）を、新入生が入学後間もないころに配布し、家庭で話し合ってもらおう。
- B 上記「A」の決定事項を各家庭の構成員が確認し、この計画に基づいて生徒の安否確認・無事な帰宅のための対応とする。

本校で会議や説明会を招集・開催する際の確認事項について

- A 保護者や外部の人を大きく招集する会議・説明会などについては、近年の防災意識の高まりもあり、次のような対応をする。

ア 以下の内容をその都度、周知する。（通年）

会議の最中の災害発生に備えるためにも、会議の前には全体に対して

「① 避難経路の確認」

「② 避難場所の確認」

「③ 係の誘導に従うこと」

と、防災に関する説明をする。

イ 災害発生時には、参加者の安全を第一とし、その会場の避難経路にそって安全に誘導する。

- B 夏場に招集する会議・行事の場合には（会議・オープンスクール・文化祭など）、以下のような説明も付け加える。

ア 猛暑日の増加にともない、以下の内容をその都度、周知する。

会議の最中の熱中症に備えるためにも、会議の前には全体に対して

「① 熱中症対策のためにこまめに水分を補給して下さい」

「② 熱中症など、具合が悪く感じた場合には、外に出て早めに休んでください」

と、熱中症対策に関する説明をする。

人の体感・行動、屋内の状況、屋外の状況

震度階級	人の体感・行動	屋内の状況	屋外の状況
1	屋内で静かにしている人の中には、揺れをわずかに感じる人がいる。	—	—
2	屋内で静かにしている人の大半が、揺れを感じる。眠っている人の中には、目を覚ます人もいる。	電灯などのつり下げ物が、わずかに揺れる。	—
3	屋内にいる人のほとんどが、揺れを感じる。歩いている人の中には、揺れを感じる人もいる。眠っている人の大半が、目を覚ます。	棚にある食器類が音を立てることがある。	電線が少し揺れる。
4	ほとんどの人が驚く。歩いている人のほとんどが、揺れを感じる。眠っている人のほとんどが、目を覚ます。	電灯などのつり下げ物は大きく揺れ、棚にある食器類は音を立てる。座りの悪い置物が、倒れることがある。	電線が大きく揺れる。自動車を運転していて、揺れに気付く人がいる。
5弱	大半の人が、恐怖を覚え、物につかまりたいと感じる。	電灯などのつり下げ物は激しく揺れ、棚にある食器類、書棚の本が落ちることがある。座りの悪い置物の大半が倒れる。固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがある。	まれに窓ガラスが割れて落ちることがある。電柱が揺れるのがわかる。道路に被害が生じることがある。
5強	大半の人が、物につかまらなると歩くことが難しいなど、行動に支障を感じる。	棚にある食器類や書棚の本で、落ちるものが多くなる。テレビが台から落ちることがある。固定していない家具が倒れることがある。	窓ガラスが割れて落ちることがある。補強されていないブロック塀が崩れることがある。据付けが不十分な自動販売機が倒れることがある。自動車の運転が困難となり、停止する車もある。
6弱	立っていることが困難になる。	固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。ドアが開かなくなることがある。	壁のタイルや窓ガラスが破損、落下することがある。
6強	立っていることができず、はわないと動くことができない。揺れにほんろうされ、動くこともできず、飛ばされることもある。	固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。	壁のタイルや窓ガラスが破損、落下する建物が多くなる。補強されていないブロック塀のほとんどが崩れる。
7		固定していない家具のほとんどが移動したり倒れたりし、飛ぶこともある。	壁のタイルや窓ガラスが破損、落下する建物がさらに多くなる。補強されているブロック塀も破損するものがある。

地盤・斜面等の状況

震度階級	地盤の状況	斜面等の状況
5弱	亀裂※ ¹ や液状化※ ² が生じることがある。	落石やがけ崩れが発生することがある。
5強		
6弱	地割れが生じることがある。	がけ崩れや地すべりが発生することがある。
6強	大きな地割れが生じることがある。	がけ崩れが多発し、大規模な地すべりや山体の崩壊が発生することがある※ ³ 。
7		

※1 亀裂は、地割れと同じ現象であるが、ここでは規模の小さい地割れを亀裂として表記している。

※2 地下水位が高い、ゆるい砂地盤では、液状化が発生することがある。液状化が進行すると、地面からの泥水の噴出や地盤沈下が起こり、堤防や岸壁が壊れる、下水管やマンホールが浮き上がる、建物の土台が傾いたり壊れたりするなどの被害が発生することがある。

※3 大規模な地すべりや山体の崩壊等が発生した場合、地形等によっては天然ダムが形成されることがある。また、大量の崩壊土砂が土石流化することもある。

ライフライン・インフラ等への影響

ガス供給の停止	安全装置のあるガスメーター（マイコンメーター）では震度5弱程度以上の揺れで遮断装置が作動し、ガスの供給を停止する。 さらに揺れが強い場合には、安全のため地域ブロック単位でガス供給が止まることがある※。
断水、停電の発生	震度5弱程度以上の揺れがあった地域では、断水、停電が発生することがある※。
鉄道の停止、高速道路の規制等	震度4程度以上の揺れがあった場合には、鉄道、高速道路などで、安全確認のため、運転見合わせ、速度規制、通行規制が、各事業者の判断によって行われる。（安全確認のための基準は、事業者や地域によって異なる。）
電話等通信の障害	地震災害の発生時、揺れの強い地域やその周辺の地域において、電話・インターネット等による安否確認、見舞い、問合せが増加し、電話等がつながりにくい状況（ふくそう）が起こることがある。そのための対策として、震度6弱程度以上の揺れがあった地震などの災害の発生時に、通信事業者により災害用伝言ダイヤルや災害用伝言板などの提供が行われる。
エレベーターの停止	地震管制装置付きのエレベーターは、震度5弱程度以上の揺れがあった場合、安全のため自動停止する。運転再開には、安全確認などのため、時間がかかることがある。

※震度6強程度以上の揺れとなる地震があった場合には、広い地域で、ガス、水道、電気の供給が停止することがある。

大規模構造物への影響

長周期地震動※による超高層ビルの揺れ	超高層ビルは固有周期が長いこと、固有周期が短い一般の鉄筋コンクリート造建物に比べて地震時に作用する力が相対的に小さくなる性質を持っている。しかし、長周期地震動に対しては、ゆっくりとした揺れが長く続き、揺れが大きい場合には、固定の弱いOA機器などが大きく移動し、人も固定しているものにつかまらないと、同じ場所にいられない状況となる可能性がある。
石油タンクのスロッシング	長周期地震動により石油タンクのスロッシング(タンク内溶液の液面が大きく揺れる現象)が発生し、石油がタンクから溢れ出たり、火災などが発生したりすることがある。
大規模空間を有する施設の天井等の破損、脱落	体育館、屋内プールなど大規模空間を有する施設では、建物の柱、壁など構造自体に大きな被害を生じない程度の地震動でも、天井等が大きく揺れたりして、破損、脱落することがある。

※規模の大きな地震が発生した場合、長周期の地震波が発生し、震源から離れた遠方まで到達して、平野部では地盤の固有周期に応じて長周期の地震波が増幅され、継続時間も長くなることがある。